

# 第3章

## 本会議・サイト活動

## 京都サイト（2013年8月2日～7日）

### ■京都サイトコーディネーター

ヴァーホアンミン

横田真彩

Cruz Arroyo

Madison Mears

### ■京都サイト理念

日本の古都として伝統文化が今なお息づき、長い歴史を彷彿させる建築物が立ち並ぶ京都。グローバル化の進展により文化の画一化や普遍化が加速し、地域文化の個性が消失していく中で、京都の文化はその特性を失うことなく、古の心を思い起こさせる。第一開催地では、両国参加者が日本の文化や伝統に触れることで、アメリカ文化との違いを認識し、文化の差異を越えて相互理解を図る。このような体験の共有により、地域文化や伝統文化とは何かを再考し、グローバル社会において地域固有の文化をどのようにして維持していくべきかを考える。また、京都議定書が締結された当地で、自然との共生や環境問題にも目を向け、2013年以降のポスト議定書期間における新しい国際的枠組みづくりの課題について考察する。

### ■サイトスケジュール

8月2日（金）

米国側参加者到着

8月3日（土）

開会式

アイスブレイク

スキット

8月4日（日）

下鴨神社訪問

分科会フィールドトリップ・活動

8月5日（月）

総合地球環境学研究所訪問

京都迎賓館訪問

AIU-HSD 合同ディスカッション

8月6日（火）

茶道裏千家資料館訪問

分科会活動

8月7日（水）

長崎へ出発



■具体的な活動

**第65回日米学生会議開会式**

式次第

- ・開会の辞：日本側副実行委員長 川野さりあ
- ・主催者挨拶：一般財団法人国際教育振興会理事長 大井孝
- ・来賓祝辞：外務省 関西特命全権大使 小島誠二  
京都市副市長 藤田裕之  
駐大阪・神戸米国総領事館 広報担当領事兼関西アメリカンセンター館長  
キース・ロメル  
日米学生会議同窓会会長 橋本徹
- ・内閣総理大臣メッセージ
- ・日米学生会議参加者代表挨拶  
日本側実行委員長 竹内正人  
米国側実行委員長 ポール・ヤラベ
- ・祝電披露 京都府知事 山田啓二氏より
- ・第65回日米学生会議ビデオイントロダクション
- ・基調講演：京都大学大学院 教育研究科副研究科長 鈴木晶子
- ・閉会の辞：米国側副実行委員長 ノブコ・マスノ



開会式後のレセプションにてご来場頂いた皆様と

第65回日米学生会議が開催されますことを心からお祝い申し上げます。日米両国の学生の相互理解や友好交流を深められ、会議に参加される学生の皆様が、今後日米間の友好交流親善及び世界平和の一翼を担われていくことを期待いたします。日米学生会議が実り多いものとなりますよう、お祈り申し上げますとともに、ご参観の皆様の今後のご活躍を祈念いたします。

平成25年8月3日 京都府知事 山田啓二

### 第3章 本会議・サイト活動

アメデリが京都に着いた翌日、未だ興奮と不安の入り混じる中、その混沌とした気持ちを落ち着かせるかのように開会式は始まった。外務省関西特命全権大使、京都市副市長、駐大阪・神戸米国総領事館広報担当領事そして我ら学生会議のアラムナイの方々からの温かい祝辞をいただいた。こうした学生会議を通してでしかお会いできない方々から激励をいただき、本会議への意

気込みは増すばかりであった。また、内閣総理大臣からのメッセージ、京都大学大学院教育研究科副研究科長である鈴木晶子様からの基調講演もあり、個人的には講演での精神と身体、日常と科学、情報と知識という三本立てのお話がとても興味深かった。その後立食パーティーが開かれ、デリは各々お話ししたい方々のご挨拶し、話に花を咲かせた。(吉井拓真)



アメデリの到着



オープニングオリエンテーション

#### アイスブレイク

興奮冷めやらぬアメデリとの対面を経た明るく日、第65回日米学生会議の開会式を前にアイスブレイクを宿泊所にて行った。全員が輪になり各々の名前、専攻、学年、JASCに懸ける想い等を紹介した。事前にアメデリの紹介文を読んでいた私は、各々の声を聴くことで改めて一人一人を認識した。そして、JASCが始まるんだなと感じた。JASCを終わりたいま、当時を振り返るとまだまだみんな自分を出せていなかったなと思う。まだ互いを探り合っていたからだ。このアイスブレイクは互いを知ることでもあるが、知るきっかけにもなったと思う。自分と共通する専攻、趣味、想いを見つけることでその後の会話に存分に

取り入れることができたからである。

(中村優太)

#### スキット

スキットとは本会議の最初の段階で、アメリカ側参加者・日本側参加者それぞれが自国の文化やメンバーの紹介等を目的として行う小劇である。私はスキットの担当であったので、人並み以上にスキットに対する思い入れがあった。

日本側のスキットに関していえば、全体で練習する時間はあまりなかったが、皆の協力により、本番は大成功であったと自負している。私自身とても楽しみ、何よりもスキット後に日本側のみならずアメリカ側の参加者からも“楽しかった”と言ってもらえたことが嬉しかった。

アメリカ側のスキットに関していえば、上記で日本側は「練習する時間はあまりなかった」と書いたが、アメリカ側参加者は空港で初めてスキットについて聞かされ、練習をしたというから、とても驚いた。アメリカ側のスキットも各メンバーの個性を感じさせるとても楽しいものであった。スキットを終え、以後の本会議への期待がより高まった。(中澤彩)



アメデリのスキット

### 下鴨神社訪問

下鴨神社は世界遺産の一部とだけあって、厳かで立派であり、中を歩いているだけで歴史の重みのようなものを感じた。同じ建物が平安時代から存在しているのかと思うと何だか不思議でたまらず、思わずアメリカ側の参加者に日本の歴史がいかにかいかに長いかを語ってしまっていた。実際に神社自体の歴史を聞くことができたが、これが非常に興味深かった。下鴨神社の歴史とともに神道についても学ぶことができ、日本人であっても知らないような知識を得ることができた。年に数回訪れる神社というものの起源であり、且つ日本人と深い繋がりを持っている神道であるが、それに対する自分の知識の浅さを実感することができ、貴重な

経験になったとすることができる。また、下鴨神社では京料理をご馳走になり、日本の伝統を食からも感じることもできた。葵祭の季節になったら再び訪れてみたいと強く思った。(橋本萌)



下鴨神社にて

### 総合地球環境学研究所

京都の地球総合研究所では、最初に施設の見学をさせて頂いた。自然がとても多く、開放的で気持ちよく仕事するのに望ましい環境であった。そして、ここでは地球環境についてのレクチャーを英語で伺った。最初のレクチャーは Dr. Niles によるもので、Anthropocene についてであった。2つ目のレクチャーは Dr. McGreevy によるもので地域の環境問題への取り組み方についてであった。私は環境問題と社会という分科会に所属していたというのもあり、どちらのレクチャーもとても興味深く、大変勉強になることばかりであった。レクチャーの後には、分科会の枠を超えて、環境問題についてのディスカッションを行った。いつも自分が所属している分科会ではない人達と議論をすることで新しい視点で環境問題について考える事ができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。(小林薫子)

### USHSD 高校生ディスカッション

USHSD とは、米国と日本の高校生が約10日間の共同生活をしながら行う国際交流プログラムです。日米学生会議の高校生版だとも呼べるでしょう。USHSD との交流では平和がテーマということで、まず日米学生会議側から6月に行われた沖縄自主研修についてのプレゼンを行い、その後10人弱のグループに別れてディスカッションを行いました。沖縄の基地問題を中心に、「抑止力」や「勢力均衡」などの高校生には高度な用語を駆使しながら議論するUSHSD 参加者もあり、大学生に対しても物怖じしない姿勢に感心させられました。それに影響を受けてか、交流終了後の移動の際等に、沖縄研修を体験していない米国側参加者と日本側参加者とで沖縄について話し合う姿が見られました。(吉井知史)



高校生とのディスカッションの様子

### 京都迎賓館訪問

日本の伝統技術とモダン様式が融合した建築物。国賓など賓客に最大限のおもてなしをする場として存在している京都迎賓館。その建築物内を見学して回った。貴重な経験に参加者は胸を躍らせていた。細部までこだわり、金、銀、プラチナなどの素材を利用した空間は、一種の藝術的なものとなっておりそれぞれの部屋でのテーマや表現

方法が異なっていた。一つ一つの装飾、部屋の配置に対しての意味についてガイドの方が丁寧に説明して下さり、細部まで精巧に作られた職人の考えを学ぶことができた。建築物の見学を通して、伝統を守る重要性和時代とどのように強調していくかについて考えさせられた。(竹内正人)



京都迎賓館内

### 裏千家茶道資料館訪問

第1サイト京都。茶道体験をしに裏千家茶道資料館を訪問した。日本の茶道文化が世界にいかに広まっているかを知ることができた。日本に住んでいた人でも知らない事が多くあり、大変刺激的な体験であった。驚いたのが、茶道体験のスタッフの方が皆流暢に英語をお話になっているということ、また、たくさんの外国人の方が学びにいらっしやっていることであった。

普段暮らしていると、日本人であっても、なかなか日本人らしい事をしないものだ。恥ずかしながら、日本の伝統文化について、語る経験が少ないように思う。そんな中、茶道体験は、まさに日本らしい体験で、こういう経験こそ、国際交流に興味のある日本人は体験しなくてはいけないと感じた。

また、アメリカ側の参加者と共にそれを体験する事で、自身の文化を相対化して見る事もできたと思う。とても良い経験になった。(大野峻典)

### サイトコーディネーター後記

第65回日米学生会議は日本文化象徴の地とも言われる古都京都で幕を開けた。京都サイト運営を務める中で一番の挑戦だと感じたのは「第一開催地」と「日本の京都」という当サイトの二側面を常に意識し、バランス良くコーディネートに臨まなくてはならないことだった。したがって「第一開催地」として、コンテンツもフィールドトリップや講演に留まらず、少しでも参加者がお互いのことを知り合えるよう、交流の時間も忘れずに盛り込むことを心掛けた。アイスブレイク、スキット、京都市内見学の時間、そして公共交通機関での移動時間までもが交流を楽しめる時間となった。そして「日本の京都」だからこその学びを追求した結果、京都大学での開会式とレセプションに始まり、下鴨神社訪問や裏千家での茶道体験、京都迎賓館の訪問を通して、日本の時代と共に変わりゆく美しい文化と、時代を経ても変わらずに息づく文化を参加者各々が肌で感じ取り貴重な学びを得ることが出来た。また、総合地球環境学研究所での講演やAIU高校生国際交流プログラムの高校生達と平和について交わした議論

を通して、社会が抱える課題に対し解決の糸口を探るために必要な、様々な角度からの見識を深めることが出来た。

どの箇所を取っても、本当に多くの方々の温かなお力添えがあつて初めて、それぞれに意味の籠ったコンテンツが集結し、全体として非常にバランスのとれたサイトを実現することができたと感じる。最終夜に迎えたリフレクションでは第一サイトだとは考えられないぐらい内容の濃い話し合いができ、参加者の感動の涙までも目にした。また、このタイトスケジュールは、疲れを抱えながらも一生懸命ついてきてくれた参加者と、アメリカ側サイトコーディネーターのMadiとCruzの非常にフレキシブルで思いやり溢れた協力なしには実現できなかった。本当に有難う。

最後にこの場をお借りして、京都サイトでの開催を可能にして下さった全ての方々に心からの感謝の気持ちを申し上げ、サイト総括とさせていただきます。

(ヴァーホアンミン、横田真彩)



裏千家での茶道体験



朝日新聞 2013年8月8日



総合地球環境学研究所にて



下鴨神社にて

## 長崎サイト（2013年8月7日～12日）

### ■長崎サイトコーディネーター

飯島千咲

竹内正人

Nobuko Masuno

Santiago Cruz

### ■長崎サイト理念

九州の最西端に位置する長崎県は、鎖国時代にも出島が世界に開かれた窓として繁栄し、ヨーロッパと中国の文化が融合した独特な文化を形成している。世界でも有数の美しい夜景を誇る長崎市は、第二次世界大戦時の原爆投下による多大な被害を受けた悲惨な歴史も合わせ持つ。参加者には、異国情緒溢れる豊かな文化を体感してもらうと共に、原爆資料館見学や平和祈念式典参列を通して、原爆問題と平和に対する意識を高めてもらう。また、佐世保市で訪問する海上自衛隊基地、米海軍基地と地域との関係や、さらには県内産業の活性化、離島振興など長崎県が抱える課題についても考察していく。

### ■サイトスケジュール

8月7日（水）

佐世保市到着

分科会活動

バーベキュー・タレントショー

8月8日（木）

米海軍佐世保基地ロック司令官講演

ハウステンボス環境施設見学

8月9日（金）

長崎市へ移動

第68回長崎原爆犠牲者慰霊

平和祈念式典参列

原爆資料館見学

語り部：山脇佳朗様講演

8月10日（土）

三菱重工長崎造船所香焼工場見学

長崎フォーラム

市内散策

8月11日（日）

インターテーブルディスカッション

分科会活動

レセプション

8月12日（土）

岩手県へ移動



■具体的な活動

タレントショー

タレントショーは皆が会って一週間が経とうとしている長崎サイトで行われた。集団生活にようやく慣れ始めてはいたが、疲労もピークに達しているところだったので、みんなの気持ちが和む良い機会となった。2人のアメデリによってユーモア溢れる司会が進められ、出演希望者が舞台上がって次々にショーが展開していった。驚くような身体の使い方をするダンス、バレエの披露、そしてアメデリがソロで日本語の曲を歌うなど、盛り沢山の内容だった。クライマックスではみんなが舞台上がって踊るくらい盛り上がり、より一層みんなが打ち解けたように感じられた。一週間共に過ごした仲間だが、舞台上で特技を披露する姿を見て、それぞれの新しい一面や意外な一面を知れた気がした。(野口真央)



A Strong Bond

BBQ

8月7日、第2サイトの長崎に到着したその日の夕方にバーベキューが行われた。皆、長旅で疲れたからだをおいしい食べ物でいやした。このバーベキューは佐世保の日米協会の支援のおかげで実現したものであり、感謝している。肉、野菜だけでなく、焼きそば、焼き鳥、お好み焼きなどたくさ

んの食べ物がでて、皆舌鼓をうっていた。話で盛り上がっているもの、夢中で肉に食らいついているもの、この後に行われるタレントショーの練習をしているもの、汗だらだらになりながらも肉をやいてくれるECや他の人たちなど多様な人たちがいたが、皆それぞれ楽しんでいるようだった。バーベキューのおかげでリラックスでき、新しいサイトの活動が本格的に始まる前に身体を休めることができた。(川口真)



お好み焼きも

米海軍佐世保基地ロック司令官講演

内容は、佐世保基地が周辺市民との対話を重要視しており、市民にとって良き隣人になるためにどのようなことをしているかというものであった。このレクチャーは私にとって特別なものとなった。その理由は、私は現在沖縄に住んでおり、米軍基地と沖縄市民の間で起こる様々な問題に触れることが多いため、同じような問題を抱えている佐世保基地の対応の仕方は興味深いものであった。ロック司令官が重要視している周辺市民との対話は、基地を置くにあたって最重要視しなければならない点だと私も

考えている。なぜなら沖縄同様、常に犠牲になっているのは、「基地周辺市民」だからである。勿論政治上の問題などはあるが、実際に基地の迷惑を被っているのは市民である。それを忘れてはならないと、改めてこの問題について真剣に考えることが出来た。この機会に感謝したい。(三科圭介)



ロック司令官と

### ハウステンボス環境施設訪問

長崎に入って2日目の8月8日には、佐世保市にあるテーマパーク、ハウステンボスを訪れた。ハウステンボスは「自然との共存」を目指し、太陽光発電や下水処理などにおいて環境に配慮した工夫が施されている。私たちはそれらの施設を見学する「環境ツアー」に参加し、電気とともに水蒸気も生成するコ・ジェネレーションシステムや、下水を微生物の働きなどを用いて処理し、トイレの水や植物の散水などに再利用するシステムなどについて学んだ。特に、電気や熱、水などを供給する管がすべて保管されている「共同溝」という施設を実際に見て、景観を壊さないために電線などを地上に出さないように工夫しているとの説明を受け、ハウステンボスを訪れる一般の人々のことまで考えて環境への取り組みが実施されていることに感激した。(鈴木悠司)

### 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列

8月9日、長崎市にて、第68回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列させて頂いた。私は、毎年テレビでこの平和祈念式典を見ていた。しかし今回、テレビで見ると実際に自分で経験することの違いの大きさを、身をもって感じた。

今回、実際に式典の場の人々や雰囲気などに触れたことで今まで“学校で学ぶ歴史の中の一部”に過ぎなかった戦争や原爆という出来事が、“現代に生きる自分たちにも深く関係する問題”に変わった気がしている。

また、私は、日米安全保障の分科会に属しているため、今回のJASCを通して太平洋戦争や核兵器について議論や勉強をしてきた。そして、その中で、どうしても学者の意見やメディアの報道内容に偏っていきがちで、“人間的”な感情面が欠けてしまう、と感じていた。今回、実際にこの式典に参列して自分の身で体感することで、そのような理論的な面だけでない部分にも考えや意識を向けることの大切さも感じる事ができた。(森泰子)



平和祈念式典

### 原爆資料館訪問

原爆投下から68年後の8月9日。私は長崎原爆資料館の厳かな雰囲気に入れながら、原爆の歴史、悲惨さを様々な遺物と共に振り返った。資料館の構成が非常に良く、ただ原爆を知るだけでなくこれからの核なき世界を実現するための課題とその解決策や、長崎市が行っていることまでが紹介されていた。とりわけ関心を惹いた点としては、原爆被災後の復興の中で、長崎市が「長崎国際文化都市建設法」を制定し「平和は長崎から」という合言葉と共に文化の向上と恒久平和を希求する都市として発展・発信していたことだ。

資料館内には年配の方以外にも、多くの子ども達の姿も見受けられた。被爆者が経験を語る映像に釘付けになっていた少年の眼には原爆という存在がどのように映ったのだろうか。どんな想いを抱いていたのだろうか。自分の次の世代にも恒久平和の想いが受け継がれることを期待したい。

(関口響)



説明を聞くデリたち

### 語り部：山脇佳朗様講演

長崎の原爆資料館では、被爆体験者の山脇佳朗さんのご講演を聞いた。原爆が長崎に落とされたとき、山脇さんは、爆心地から2.2キロの地点にいたという。父親を亡

くし、その亡骸を燃やしたという経験や、町じゅうに黒こげになって肌が熟れすぎた桃のようようになった人びと、川にただよう死体や、臓器など、町の悲惨な情景についてのお話が目に浮かんだ。長崎に、68年前の8月9日に、ピカッ光った出来事は、世界と日本に大きな痕跡を残したのだと感じた。日本もアメリカも、この出来事にしっかり向き合えていないのではないかと思う。熱光線、爆風、放射能、三つの破壊力で町をなめつくした光が、今もこの地に息づいている。そこに、日米の学生と共にあること。これが自分にとって最初で最後の貴重なチャンスだと思った。(大日方望)



講演の様子

### インターテーブルディスカッション

24日間に及ぶ本会議の折り返しの日に、各分科会から2名ずつ計8人が集まって、カジュアルなトピックや、お互いの分科会の進捗状況について議論をするというインターテーブルディスカッションが開かれた。本会議が始まってからは毎日、実行委員が企画してくれたフィールドトリップに出かけており、なかなか学生どうしでゆっくり話す時間がなく、また、参加者どうしで仲を深めてくうちに違う分科会の参加者とも議論をしたい、という欲求がたまっていたため、どのグループでも活発に議論が交わ

され、お互いに刺激を与え合ったり、知らなかった価値観に触れたりできた良い機会であった。私のグループでは本会議が始まってから話し合ってきたことの確認、ファイナルフォーラムでの発表の構想について

報告し合った。ほかの分科会と関わりのある議論をしている分科会が多く、今後複数の分科会のメンバーで議論をする機会を設けようというアイデアを得ることができた。  
(白畑春来)



### 三菱重工造船所見学

三菱重工業長崎造船場、香焼工場に見学へ行った。巨大な施設に、大型客船や、石油・LNG ガスといった天然資源の輸送用の大型の運搬船の建設過程を見ることができた。三菱重工という日本を支えてきた重工業の工場がどのように大型船舶を造り上げ、世に送り出していくのかを、建造ドックのスケール、現場の空気感、職員の方々の説明を感じながら、学ぶことができた。特に感じたのは、そのスケールの大きさである。どうやって、そんなに大きなものを作ったのか想像もつかないようなスケールだった。日本の技術の代表的な向上を訪れる事で、その偉大さを肌で感じた。

(大野峻典)



造船所の皆様と

### 長崎フォーラム

三菱重工造船所を見学した後、長崎市立図書館で開催された長崎フォーラムに参加し、長崎外国語大学学長特別補佐である溝田勉氏よりご講演をいただいた。会場は図書館内の小さなホールで行われ、JASCerが溝田先生を囲んでお話を伺えたので、講演者との距離を近くに感じられた。

講演の中で、溝田氏が「官僚制」「科学技術」「価値観の変化」などの現代の日本の9つの特徴を、私たちの7つの分科会に関連づけて紹介して下さったことが非常に印象的であった。第二サイトの長崎に入ってから、分科会でのディスカッションも方向性が定まりかけていたところであったが、そこで改めて自分たちの分科会を別の角度から捉え直すことで、私達は何を議論すればいいのかを再確認する機会となった。

(鈴木悠司)

### 長崎市内見学

文化の融合。日本と異国の文化が共生することで織り成す進化を、長崎で発見した。外国との貿易の拠点として知られる出島から、長崎市内の見学は始まった。垣間見える西洋文化やキリスト教の影響。ただし、それはあくまでも文化を感化する種に過ぎず、長崎の独自性も保たれている。この独特の文化を、長崎は原子爆弾によって破壊された過去を持つ。そこから立ち上がる過程に失われたものも、たくさんあるであろう。しかし、その経験を抜いて現在の長崎

を語ることはできない。私達は歴史から目を背けない。その歴史によって今があるならば、悲痛な体験によってもたらされた大切な教訓が必ずある。そう信じるからこそ、私達は語ることを止めない。日米両国の学生が、禁句とされる議論を繰り広げるために不可欠な材料を長崎は与えてくれた。求めよ、さらば与えられん。若者として、日本、そして世界に求める。理想を求めずして、その実現などあり得ないから。

(古村大和)



市内で長崎外大の学生と



長崎を楽しむデリたち

### サイトコーディネーター後記

第2サイトである長崎では、8月7日～9日を佐世保市内、9日～12日は長崎市内と県内2ヶ所に滞在することによって、多様なプログラムを実現することができた。

佐世保市においては、ハウステンボス敷地内の環境施設見学を通して、自然との共生を目指す企業の画期的な取り組みや学んだり、米海軍佐世保基地のロック司令官を招いての講演会を開催したりと、アカデミックなプログラムを取り入れられただけでなく、バーベキューやタレントショーなど、参加者同士の友情を深めるイベントも多く持つことができた。

長崎市においては原爆と平和、長崎の異国情緒溢れる豊かな文化を学ぶことを大きなテーマとして活動した。長崎市内入りした8月9日には、長崎市の多大なるご協力により、第68回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に、両実行委員長を含む会議代表者6名が参列できたこと、被爆体験者である山内佳朗様より平和に関するご講演を頂くことができたことは特筆すべきだろう。ま

た、一般公開形式フォーラムの開催や、現地の大学生との交流を含む長崎市内視察など、地元の方にも日米学生会議の意義を伝えられるようなコンテンツ作りを心掛けた。

サイト最終夜のお別れレセプションでは、長崎県副知事、長崎市市長を始めとする多くの方々にご臨席頂き、参加者は感謝の気持ちを伝えると共に、サイトでの思い出や、残り半分となった会議に対する熱い気持ちを語り合った。

最後に、共にサイトコーディネートを担当したアメリカ側実行委員の Nobuko Masuno と Santiago Cruz、そして長崎サイトのプログラム実施とその成功にご尽力頂いた全ての方に、心からの感謝を申し上げたい。とりわけ、長崎日米協会様及び佐世保日米協会様を主たるメンバーとする長崎サポート委員会の皆様には、プログラム企画、運営から経済的なご支援までご協力頂きまして、本当にありがとうございました。

(飯島千咲、竹内正人)



## 岩手サイト（2013年8月12日～19日）

### ■岩手サイトコーディネーター

市毛裕史

野口ゆかり

So Nakayama

Paul Yarabe



### ■岩手サイト理念

豊かな自然に恵まれ、太平洋に面し、本州一広大な面積を持つ岩手。農畜産物が豊富に生産され、また世界三大漁場の一つ、三陸海岸は全国有数の漁獲高を誇る。世界文化遺産に登録された平泉には、日本古来の自然崇拜と浄土思想が融合された建造物や庭園を鑑賞するために内外の観光客が訪れる。一方、地方の多くが直面している地域産業の衰退や過疎化などを克服し、地域を活性化していく課題もある。未曾有の大震災となった東日本大震災からの復興は、こうした被災以前から懸案であった課題を解決する好機ともなり、単なる復旧にとどまることなく、被災地を活力ある地域として再生させることが肝要であろう。岩手では、南部鉄器、さんさ踊りなど固有の伝統文化や世界遺産を見学し、復興についてのフォーラム、被災地訪問を通して地域住民、地元学生の声も聞き、震災復興や地方再生について考察したい。

### ■サイトスケジュール

8月12日（月）

岩手到着

達増拓也岩手県知事講演

歓迎レセプション

8月13日（火）

小岩井農場見学

分科会活動

8月14日（水）

被災地（宮古市）視察

8月15日（木）

神子田朝市見学

盛岡市内散策

分科会活動

8月16日（金）

分科会活動

ホームステイ

8月17日（土）

ホームステイ

地域活性化・復興フォーラム

8月18日（日）

平泉見学

福島へ移動

8月19日（月）

鶴ヶ城見学

東京へ移動

### ■具体的な活動

#### 達増拓也岩手県知事講演会

岩手サイトに入り、最初に講演して頂いたのが、岩手県知事である達増知事だった。

講演の内容は、主に東日本大震災における被災地の現状と今後の展望についてだった。復興のための地域活性化の3本の柱として、ハード面だけでなく人々の意識などのソフト面に注目した「安全の保障」や教育や医療の充実などによる「暮らしの再建」、水産業を中心とする中小企業の再建といった「なりわいの再建」が挙げられていた。さらに、岩手県が行っているトモダチ作戦についても説明して頂いた。この講演を通して、岩手県の取り組みについて詳しくしることができた。一方で、このような地域レベルでの取り組みというのは全国的に伝わりにくいように感じた。これからの日本を考えていく上で、このような地域レベルの取り組みをいかに理解し、支援していくことが大切だと思う。(鈴木健司)



スピーチをされる達増拓也岩手県知事

### 歓迎レセプション

ホテルメトロポリタン盛岡で開催されたウェルカムレセプションでは岩手の達増知事からのお言葉をいただくことができ、大変豪華なものとなった。そして何よりも、このレセプションで私たちはホームステイ先の家族の方々と対面することができた。たったの1日のホームステイだが、特にアメリカ側の参加者からしてみれば日本という国の一般家庭での一泊ということで相当

緊張していたようだ。ホームステイ先の家族それぞれと参加者が長く話をすることができ、お互いに緊張を解いていた。また、このレセプションで特に印象的だったのは食事であり、岩手産の材料をふんだんに使った料理がたくさん振る舞われ、参加者一同感動した。朝のドラマ「あまちゃん」で話題のまめぶなどは誰も初めて口にしよう。岩手側に暖かく迎え入れていただき、私たち参加者はその後の岩手での滞在を楽しく過ごすことができた。

(橋本萌)



レセプションでホストファミリーと

### 小岩井農場見学

小岩井農場では初めに小岩井農場の創業の理念などに関するレクチャーを聞いたあと、小岩井農場での自由時間を経たのちバスで案内をしてもらった。現在小岩井農場となっている土地はもともと不毛の地であった。それを開墾によって豊かな緑の地と生まれ変えた。牧草地を育て、森や林もきちんと管理されている。森林が持続的に育つように成長分だけ伐採するという方式がとられ、今でも植林が行われていた。また、宮沢賢治も歩いたというあじさいの一本道を歩き、豊かな自然を感じた。たとえ最初は人工的であったとしても努力を続けていくことによって自然へと変化をとげた

ことに感銘を受けた。

アメリカ側の参加者の1人は自分の故郷と似ていると話していた。逆に都会に住んでいる日本側参加者である自分の方が新鮮であった。日本開催であるが自分にとっても日本を知る貴重な機会となった。(川口真)



牛舎で飼育される牛たち

### <被災地視察>

#### 宮古市田老ホテル見学

宮古市田老ホテルは、津波の被害にあった海岸からすぐの所にあり、建物自体は津波の被害を受けた当時そのままの形で保存されている。実際にその被害を目の当たりにし、そのホテルの社長が建物の最上階から撮った津波が押し寄せる映像を見ることで、自分の中でその被害がどれだけ甚大なもので、人々の心にインパクトを与えたのか以前よりも明確になったように感じている。見学から時間が経った今でも印象に残っているのは、ガイドさんの私達に当時の状況を説明している時の表情だ。涙をうっすら浮かべながらも、拳は強く握られ、目は力強くまっすぐ前を向いていた。田老町はまたきっとさらに素敵な街となって甦る、そう確信した瞬間だった。(伊藤孝真)



津波の威力を目の当たりにするデリたち

#### 三陸鉄道乗車

被災地を見学し、シンポジウムを受けたあと、私達は三陸鉄道に乗車した。毎日東京で乗る電車とは異なる、被災した地域を見渡しなが走りする風情漂う田舎の電車に乗るのは新鮮な気分だった。被災地を見学した後ということもあり、気持ちが沈んでいた私達だったが、ゆっくり走行する電車の窓から手を出したり、風を感じたりして遊んでいるうちにみんなの顔に笑顔が戻った。窓から顔を出して景色を見て、写真を撮っている時は懐かしい気持ちになると同時に、被災前の景色と今の景色では全く違うことを考えると複雑な気持ちは隠せなかった。長崎では移動のほとんどがバスだったが、バスから降りて宮古まで風情を感じながら地元の電車に乗ったことは良い思い出になった。(野口真央)



三陸鉄道を楽しむデリ

### 復旧・復興シンポジウム

岩手県の復興に取り組む、4人の方々に話を聞かせて頂いた。元防衛庁長官・玉澤徳一郎氏からは「日本に災害が起きたときに国はどう動くのか」ということを中心に、田老町漁業協同組合・小林昭榮氏には「JF たろう復旧への取り組み」について、たろちゃん協同組合理事長・箱石英夫氏からは「田老仮設商店街のあゆみ」について、最後に、いわて GINGA-NET 代表・八重樫綾子氏からは「大規模自然災害時における“若者の力”」について話を聞かせて頂いた。それぞれ話される時間が短く、もっと詳しく聞いてみたいと思うお話ばかりだった。私が最も印象に残ったのは、漁業協同組合・小林さんの「後継者の問題とかではない。田老はたくさんの可能性を秘めていて復興に前進している。」という言葉だ。希望が持てない時期でも組合員一丸となって話し合い、希望と勇気を見いだしていった姿に、田老漁業産業の力強さと光を強く感じた。(上江洲仁美)



質問をする参加者の様子

### 浄土ヶ浜見学

岩手県宮古市にあり、三陸復興国立公園を代表する景勝地である浄土ヶ浜を見学し、復興に関するシンポジウムに参加した。浄

土ヶ浜には観光客だけでなく、海水浴をする家族連れも多く、浄土ヶ浜は地元住民に愛される場所であり、震災後に官民一体の取り組みで復旧されたという意味を見ることができた。シンポジウムでは、宮古市市長、三陸鉄道代表取締役社長、岩手県立大学教員によるご講演があり、震災後の行政、企業、学生ボランティアの取り組み事例を学んだ。地元の行政、企業、住民の復興への強い意志を感じたが、宮古市の街づくり計画など未決定なもの多くあることがわかった。今回の浄土ヶ浜見学・シンポジウム参加をきっかけに、宮古市のことを身近に感じるようになり、宮古市に関心を持ち、支援し続けようと思える機会となった。

(荒木尊士)



浄土ヶ浜での集合写真

### 神子田朝市見学

普段よりも早起きして「盛岡の台所」といわれる神子田の朝市に向かった。朝市と聞いて、魚介類を売っている市場を想像していたが、実際は野菜を作る多くの農家が店をだしている市場であった。また、野菜を売るだけの商店が並んでいるだけではなく、ひつつみという岩手の郷土料理の汁物などが売られており、その場で朝ごはんとして食べることもできた。野菜を売っているお店では、朝一番にとれたてのものを試食することができたが、どの野菜もとても

みずみずしくておいしかった。朝早かったが市場には多くの人々が集まっており、初めは山積みになっていた野菜も、帰る頃にはほとんどが売り切れていた。それぞれのお店では生産者の方が自ら販売していたため、買う側にとって生産者の顔が見える商品を買うことは安心感にもつながるし、地元の作物への愛着がわくのであろうと感じた。(白畑春来)



神子田朝市を見学する様子

#### ホームステイ

岩手サイトでは、日米からそれぞれ一人ずつがペアとなって、岩手県にお住まいのご家族にホームステイをさせていただいた。実は、僕が今回の JASC の中で一番よかったと感じているのはこのホームステイである。東京に長く住んでいる私にとって、その思い出はあまりに新鮮で、なつかしい。まがりくねった路地裏と黄色い電灯、静かにはじける線香花火と夕闇に揺れる提灯、強くて心地よい太鼓の音と盆踊りの輪、仲のいいご家族と地域の人々の温かいつながり。本会議中は、政府関係、商業関係、学術関係のイベントが多かった中、ホームステイは、本当に日本を感じられるイベントだったと思う。日米交流には、お互いの文化を示しあうことが不可欠だと考えるが、

まさに絶好の機会であった。楽しい時間ほど早く過ぎるもので、気が付けばペアのプラモドと私は次のイベントであるシンポジウムの会場に来ていた。別れ際に、ご家族の長女が泣いていた。そのことが、この素晴らしさのすべてを語っていると思う。

(小松崎遥平)



ホームステイでの着付け体験

#### 地域活性化・復興フォーラム

岩手での最終日、「岩手の魅力化」をテーマにフォーラムが行われた。前半は、地元岩手でご活躍されている方々にご講演をして頂き、後半は学生と地元のフォーラム参加者による英語でのディスカッションが行われた。大学でも地域活性化について学んでいる自身にとっては、大変実りあるフォーラムであった。地元の参加者には若者だけでなく、シニア世代も参加しており、積極的に英語で自分の意見を述べたり、私たちの話を聞いたりする姿が印象的だった。一生懸命議論に参加し、「このまちを良くしたい！」というような気持ちが伝わってきた。岩手の方々はとても優しく、おもてなしの心が溢れていて、何よりも地元愛が強く感じられた。岩手でのステイを通して、岩手の最大の魅力は「人」と考える。

4つのサイトの中でも一番思い出に残るサイトと言っても過言ではない。もう一度この場所に帰り、ここの人々のために、このまちの発展に貢献したい。(大西由起)



地元民と会議参加者の議論の様子



ご協力頂いた岩手県と盛岡市の方々

### 平泉見学

平泉では中尊寺と毛越寺を訪ねた。私にとっては今回が初の東北訪問であったこともあり、近年世界文化遺産に登録された平泉の訪問はとても興味深かった。

中尊寺に関していえば、やはり金色堂は豪華絢爛で見応えがあった。アメリカ側参加者も黄金に輝く阿弥陀堂を見て、感動に沸いていた。平安時代の奥州藤原氏の隆盛を今に伝える貴重な遺構に面し、このような遺跡の価値を正しく理解し、次世代に継承していかなければならないと思った。

毛越寺に関していえば、池を中心に土地

を広々と使い構成された庭園は、独特の空気を纏い、不思議と時間の流れを感じさせなかった。そのような中、友と歩きながらお互いについて話す時間は、心穏やかで、とても貴重に感じられた。

自然と調和し、浄土を模した平泉の景観は、紛糾するRTの議論に疲れた私の心を少なからず癒してくれた。(中澤彩)



中尊寺の前で

### 鶴ヶ城見学

8月19日、私達は鶴ヶ城の見学に行った。鶴ヶ城は、幕末、明治新政府に最後まで抵抗し続けた会津藩の城である。

一緒に回ったアメリカ側の参加者は、お城の建築や外観の美しさにも興奮していたが、城内に展示されている白虎隊員の写真や略歴を見て、その平均年齢の低さに驚いていた。

鶴ヶ城は、それまでのコンテンツのように、講演やディスカッションがあるわけではなく、分科会で扱っているトピックに大きく関係するわけでもないし、日本人の間でも特に有名な歴史的観光地というわけでもない。正直に言って、そういう場所をどうやったらアメリカ側参加者に興味を持ってもらえるだろう、と思っていた。日本の歴史を説明しながら私が感じたのは、英語で説明することの難しさよりも、もっと深

く日本の事を知らなければいけない、ということだった。日本人として自信を持って歴史や文化をしっかりと説明できるように、これから更に知識や見聞を身に付けて行きたい。(森泰子)

#### ■サイトコーディネーター後記

80年あまりの歴史を持つ日米学生会議の歴史上、初の開催地となった岩手県。東日本大震災からの復興、地域活性化、そして岩手の豊かな文化や自然を、地元の方々とともに体感し学ぶことに主眼を置いて活動した。まず小岩井農場見学や世界遺産平泉見学を通し、岩手の豊かな文化や自然を実際に体感する機会を創ること、また被災地見学や復旧・復興シンポジウムを通して新聞やニュースだけではわからない震災や復興の実状を把握すること、そしてホームステイや地域活性化フォーラムなど会議参加者と地元の方々の相互交流の機会を多くもつことにより、実際に経験してみて初めて感じる岩手の自然や伝統文化、地元の方々の復興への想い、そして今後の展望についての深い理解を、会議参加者が得られるような工夫を施した。

多くの参加者が口々に4つの開催地のうち岩手開催が最も思い出に残っていると口にしていく姿をみて、岩手開催の成功を自負している。もちろん、会議計画当初は震災から2年が経ったとはいえ、未だ復興に向けて多くの課題が残されている岩手県で、無事に会議が開催できるかどうかさえ不安であった。しかしながら、今後の日米学生会議地方開催のモデル事例になると思われるくらいに卓越した会議を実現できたのは、ひとえに岩手の人々の惜しめない多大なご

支援ご協力のお陰であった。

たしかに岩手の自然や文化遺産には魅せられたが、岩手サイトを企画していて最も感じた岩手の魅力は、「人」にあった。まず、県庁OBである邨野善義様今泉敏朗様、新渡戸基金の藤井茂様が、岩手における財務活動を一手に担い、不慣れな実行委員に会議計画当初から一貫してご助言やご支援をいただくことになる岩手サポート委員会を組織して下さった。岩手サポート委員会が音頭をとってくださることで過去に類をみない援助を頂くことができ、大変豪華な歓迎レセプション、宮古市での被災地視察プログラムの企画をはじめ、多くの素晴らしいプログラムの実現に至った。また、会議開催の事務手続きを担当される県庁や市役所、国際交流協会の職員の皆様が、私たち日米学生会議実行委員と一体となって開催の準備、会議スケジュールの企画作成、その段取り、講師の選定などに至るまで地元の視点や実状も踏まえご指導いただいたことは、誠に有り難かった。特に岩手県庁NPO・文化国際課の石木田浩美様、盛岡市国際交流協会の伊藤たみ子様、岩手県国際交流協会の宮順子様には、岩手サポート委員会の方々と共に、知事講演からホームステイプログラム、地域活性化フォーラムまで全行程に熱心なアドバイスをいただき、会議実現に欠かす事の出来ないご協力を得た。小岩井農場の皆様からは、開業以来「人」が丹精を込めて、量より質にこだわって製品販売をしていることをツアーや講義を通して熱心に伝えて頂き、また神子田朝市では野菜を眺めていると、地元の方がそれはどんな野菜でどんな料理に使うのか丁寧に教えてくれた。岩手開催で最も難航するか

に思われた被災地視察では、宮古市、岩手県立大学災害復興支援センター、三陸鉄道株式会社、そして日米学生会議 OB の平竹雅人様の多大なるご尽力の下、会議参加者にとって復興への思いを心に刻む貴重な機会とすることができた。そして、東日本大震災後という状況が必ずしも万全ではないことが予想されながらも、本当の家族のように快くホームステイを引き受けてくださった岩手の皆様が居てこそ、会議参加者が岩手に「ただいま」と言えるような日米学生会議と岩手県の親密な関係を築くことができたと実感している。このように会議計画から終了まで、岩手の「人」の温かみに幾度となく触れることができた。

上記の他、ここではお名前を挙げることの出来なかった実に多くの皆様のご支援、ご協力のもと無事に会議を成功裏に終了させることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。また、アメリカ側実行委員の So Nakayama と Paul Yarabe のタフな協力も成功に欠かすことができなかった。本当にありがとう。「われ太平洋の懸け橋にならん」日米関係に注力した岩手県の偉人、新渡戸稲造の有名な言葉だ。冒頭で述べた通り、日米学生会議は約 80 年の長い歴史を誇るが、不思議なことに第 65 回になってようやく日米の懸け橋のふるさとである岩手に初めて「里帰り」を果たした。現代の国際人としてこれから活躍するはずであろう第 65 回参加者が岩手で学んだことを社会に還元し再び岩手の地を訪れてくれたら、岩手サイトコーディネーターとしてそれ以上に幸せなことはない。将来会議参加者と岩手がグリーンピア三陸宮古で植樹

した桜で繋がり、復興という名の花が咲き開くことを願って筆を置かせて頂きます。

(市毛裕史、野口ゆかり)



岩手日報 (2013年8月13日)



岩手日日新聞社

(2013年8月14日)





ウェルカムレセプション



地域活性化・復興フォーラム



記念植樹

## 東京サイト（2013年8月19日～24日）

### ■東京サイトコーディネーター

川野さりあ

森田修弘

Katherine Jordan

Patrick Meuer

### ■東京サイト理念

世界最大のメガシティ首都東京。江戸開府から四百年有余、東京は日本の政治、経済の中核であると同時に伝統を守りつつも常に新しいものを取り入れ、その魅力は外国人の好奇心を刺激している。国会や官公庁、米国を始めとする外国の公館、企業、国際機関が集中する一方、上野、浅草に見られる下町情緒溢れる古き良き日本の一面も持つ。またファッション、アートの分野で国際交流が盛んな原宿、秋葉原はもとより、博物館や美術館など文化施設にも恵まれ、文化芸術の中心地としてプレゼンスを発揮する。今や世界中の人が集まり、様々な価値観が交錯するこの街で、第65回日米学生会議の活動を総括して、分科会の議論や成果を社会に発信する。

### ■サイトスケジュール

8月19日（月）

東京到着

分科会活動

8月20日（火）

デロイトトーマツ

コンサルティング訪問

小泉進次郎衆議院議員講演

外務省レセプション

8月21日（水）

米国大使館訪問

公使公邸レセプション

ジョン・マケイン上院議員講演

8月22日（木）

ファイナルフォーラム

アラムナイレセプション

8月23日（金）

新実行委員選挙

ファイナルリフレクション

8月24日（土）

米国側参加者帰国



■具体的な活動

**デロイトトーマツコンサルティング訪問**

デロイトトーマツへの訪問は、私個人にとっては初めてのコンサルティング会社訪問となった。コンサルティングの知識がなかった私にとって、デロイトトーマツで伺ったお話はとても興味深い内容だった。様々な分野の知識が必要なコンサルティングの仕事の説明に、コンサルタントの方を尊敬すると同時に、コンサルティングの仕事の難しさを感じた。その一方で、職員の方々が以前勤めていた職場や大学で専攻していた分野といったバックグラウンドが大変多様性に満ちたものであったことに驚き、コンサルティングの仕事が多岐にわたる事を知り、個人的に関心を持った。お仕事の内容を伺う限り、私個人にコンサルティングの仕事は向いていないと感じたことは事実であるが、コンサルティングの仕事に関わらず、外資系の会社ということから、個人的には職場で英語を使って仕事ができるという環境に魅力を感じた。(兼子莉李那)



デロイトトーマツの会議室にて

**小泉進次郎衆議院議員講演**

東京のオリンピックセンターにて、自民党の議員である小泉進次郎氏にご講演いただいた。あえて政治的な話はせず、ご自身の学生時代や、英語習得の苦悩などについて

語ってくださった。印象に残っているのは、若者の政治離れについて質問された際に、政治に興味をもってもらうには政治家に対して、人として興味を持ってもらうことが大切であると仰っていたことだ。そのような意味合いで今回、我々学生も親しみのある学生話を、小泉氏はしてくださったのではないかと個人的には感じた。これも小泉氏の政治的戦略の内かもしれないが、私は人間として小泉氏に興味を持った。今後小泉氏の動向を追う中で政治に対して積極的になるよう心がけたいと思う。

(木村優吾)



デリの質問に答える小泉進次郎氏

**外務省レセプション**

外務省、文部科学省、賛助団体の方々をはじめ、日米学生会議同窓会会長、副会長のご出席のもと盛大に執り行われた。JASC当初は互いに顔を知らないレセプションが苦手だった私も、JASC 最後となる外務省主催レセプションでは積極的に多くの各界で活躍されている方々のお話を伺い、JASCへの、日本への、世界への見識をさらに一層広げることができた。多くのアラムナイの方々が出席なさっている中で白髪の紳士の方との出会いがひとつ印象に残っている。将来のJASCのレセプションの時に自分も

この方のように JASC の OB として立派に戻ってきたいと思った。長い歴史を持つ JASC は多くのアラムナイを始めとする賛助団体や関係各位のご支援の下で活動できていると改めて感じた。ここに改めて感謝申し上げます。(中村優太)

#### 米国大使館訪問

米国大使館でのディスカッションはそれぞれの興味に応じて、4つのグループ(ex.TPP協定、両国での留学生数等)に分かれ、米国大使館で働く外交官の方を交えて議論が進められた。まず、驚かされたのは外交官の議論のリードの仕方であった。学生側が「1」を送ると、それを膨らませて「2」として新しい議論を返してくる。それが続き、気付いたら議論の幅が広がり、トピックの本質に近づいていっているのが私達学生自身でも感じられた。また、その行為により議論が進むだけでなく、誰でも発言しやすい空気が作られ、グループとしてのまとまりがでていたことにも、驚かされた。知識や論理、話し方以外のことでもいろんなことを学ばせてもらった米国大使館のディスカッションであった。(伊藤孝真)



ディスカッションの様子

#### ジョン・マケイン上院議員講演

本来、プログラムになかった米国上院議員であるジョン・マケイン氏にご講演いただき、学生が彼に直接質問できたのは参加者全員にとって非常に有意義な経験となった。マケイン上院議員の経験豊富なバックグラウンドから語られる日米関係と彼の政治観は奥深く、アメリカの政治家のすごさを肌で感じる事ができた。また幸運な事に、私はマケイン議員に直接質問する機会を得ることができた。多くの政治家が一般の市民や学生と比べて、強力な地盤や支援を得ていることに対してどう思うかを議員に質問したところ、より多くの市民が政治参加できる政策やプログラムを作る必要があるとの答えをいただいた。草の根や、市民から政治参加をどのように実現するかヒントを彼のような偉大な政治家の講演から得ることができたのは私にとって大きな衝撃だった。(大沼雄貴)



講演をするジョン・マケイン議員

#### ファイナルフォーラム

各分科会が約1ヶ月かけて議論してきた成果を社会に発信する最終発表会であるファイナルフォーラムが、青山学院大学にて行われた。分科会活動の終盤、特に東京サイトに入ってから、このフォーラムの発表準備に夜な夜な追われていた分科会がほ

とんどだったのではないだろうか。準備段階では、分科会メンバーの間で意見が衝突し、苦しい思いをすることもあった。しかし、最終的には各メンバーの思いや情熱を一つのプレゼンにまとめ上げることが出来た。パワーポイントやスキットなど、内容形式共に様々であったが、それぞれの分科会の個性が表れていて完成度の高いものであった。もちろん反省点も残されたが、未来へと繋がる大きな功績となった。

(伊井佐織)



発表の様子

### アラムナイレセプション

本会議の集大成であるファイナルフォーラムの後、私達は NHK 青山荘に移動し、日米学生会議 OB・OG の方々と共にレセプションを楽しむこととなった。戦前の回からの参加者から第 64 回（前回）の参加者の方まで、幅広い年代の方々にお集りいただいた。その方々との交流を深めるうちに明らかになったことは、時代によってディスカッションの形式や内容は異なるものの、会議を通じて我々が感じてきたものは諸先輩方のそれと殆ど変わることがない、ということであった。組織としての記憶・精神は、ちゃんと次の世代にも受け継がれ、連続性を保っているのだと実感した。この素晴らしい経験を次の世代にも体験してほしい、

という気持ちをバトンとして繋いできた結果が表れているのだろう。我々には、このバトンを次の世代に着実に繋いでいく義務がある。そう身が引き締まる夜であった。

(吉田知史)



レセプションの様子

### サイトコーディネーター後記

終り良ければすべて良し、という言葉があるように最終サイトの印象が最後にその年の JASC の印象を左右するというプレッシャーの下、東京サイトの準備は始まった。限られた期間の中で如何にその地の魅力を十分に伝えるコンテンツを組めるか、如何にアメリカ側参加者に日本人の誇りと伝統を表現できるか。サイト企画は我々実行委員に与えられた最高の特権であるが、その分、責任重大でもあった。ホスト側として大国アメリカに対し、日本国が諸外国の中でも独特の美しさを持っていること、そして日米学生会議は「ただの」国際交流プログラムではないことを知ってもらいたいという意地もあった。

第 65 回東京サイトは、「日本の政治そして経済の中核としての東京」という点を重視しコンテンツを組んでいった。その結果、丸の内に事務所を構えるデロイトトーマツコンサルティングへの訪問、衆議院議員小

### 第3章 本会議・サイト活動

泉進次郎氏による講演、米国大使館への訪問、ジョン・マケイン米国上院議員による講演、と各方面のご協力の下、歴史のある日米学生会議だからこそ実現できたであろう大変豪華で充実したコンテンツを組むことができた。また、連日開かれたレセプションではアラムナイの方々を始めとした社会の第一線で活躍をされてきている方々と交流をすることによって、参加者たちに改めて JASC のもたらす人との繋がりの魅力を感じてもらうことができたと思っている。また、ファイナルフォーラムでは全参加者が各分科会で会議を通して議論し学んできたことを出し切り、最終日前日に行われた第 66 回会議の執行委員選挙では多くの立候補者の中から、この会議の歴史と伝統を引き継いでいく新しい 16 人に櫂を渡すことができた。こうして第 65 回日米学生会議は幕を閉じたのである。

思えば1年間準備してきた本会議がクライマックスに達しているにも拘わらず、最終サイト東京で私たちは常にサイトロジスティックのことで頭をいっぱいにしてきた。しかし目まぐるしい日々の中にあって、ファイナルフォーラムでの参加者たちの自信に溢れた顔、数多く出た新実行委員選挙の立候補者、そして別れ際に流れた涙、これらを見たときに最高に幸福な気持ちに包まれるのだった。多くの方々の温かいご支援によって成立したあまりにも贅沢なプログラムが、一つひとつ、目の前で現実のものとなっていく。その度に言葉では言い表せない程の感動を覚え、東京サイトの担当で良かったと心から思えた。

東京サイトの開催にあたり、実に多くの方々にご支援ご指導賜りました。このサイトを実現可能にしてくださった全ての方々にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。有難うございました。

(川野さりあ、森田修弘)

